

「あ！萌え」の構造：序論

(5)

応用人間科学研究科 齋藤清二

17. 「カップ焼きそば現象」の第3の様相——ハルカの入れたお茶

さて今回はいよいよ、前回の予告通り、「カップ焼きそば現象」の第3の例示である「ハルカの入れたお茶」事件について考察してみよう。何度も繰り返しているように、「カップ焼きそば現象」とは、アニメ「みなみけおかえり」において、南家の三女千秋（以下チアキ）によって提唱された（哲学的）仮説である。ハルカ（南春香）は、チアキの姉（三姉妹の長女）で高校2年生。ハルカは南家では、母親的な役割を担っているが、周囲の男性へのモテ度ではナンバー1である。さすがの天才少女チアキもハルカには頭が上がらない。

さて、問題のシーンを、できる限り正確

に描写してみたい。元旦、南家を訪れたタケル（おじさんと呼ばれているが実は従兄）が、チアキとトウマやクマのふじおかに悩みを聞いてもらったりして時間を潰しているところに、ハルカとカナ（2女）が初詣から帰ってくる。ぐちぐちと愚痴をチアキとトウマに語り続けていたタケルに、ハルカは「今、新茶入れますね」と笑顔で声をかけ、「新茶」と書かれた茶筒から急須にお茶の葉をいれ、湯飲みに注いだいっぱいのお茶を差し出す。それに喜んだタケルは、一口飲んで、「ありがとうハルカちゃん。やっぱり新茶はいいね」と、笑顔を見せる。チアキとトウマは顔を見合わせながら、「さすがはハルカ姉様、あの面倒で繊細なタケルを一発で元気づけた」「お茶入ただけだぞ」と感心する。ところが、そこへカナがトイ

レから戻ってきて、「あーあ、ハルカ、間違っているよ、それは古いお茶だよ」と指摘する。慌てて茶筒を確認したハルカは恥ずかしさに頬を染めるが、タケルも同時に顔を赤らめる。それを観ていたチアキとトウマは口を揃えて、「カップ焼きそば現象！」と連呼する。

さて、上記の「ハルカの入れたお茶事件」では、いったいどこが「カップ焼きそば現象」なのだろうか。単純に考えると、「ハルカの入れたお茶」は、実は新茶ではないのに、ハルカとタケルによって、新茶だと信じ込まれていたということから、「お茶」と「新茶」の関係が「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係であると考えるのが自然である。しかし、よく考えてみると、実はこの事件には、新茶は一度も登場していない。実際に登場しているお茶は一種類だけで、それはそもそも新茶ではない。ただ単に複数の当事者によって、新茶だと信じ込まれていただけである。今回の事件で最も重要なポイントは、本来「新茶」ではない「ただのお茶」が、新茶と同じ効果を発揮したということである。ということは、言語的な見かけ上の「相似」とは裏腹に、ここで「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係と同等の関係にあるのは、「お茶」と「ハルカの入れた（特別の）お茶」の関係であるという考え方がなりたつ。そこで生じた「タケルを元気にさせた影響力」は、見かけ上、「新茶の効果」だと信じ込まれていたが、実は「新茶」ではなく、「ハルカが入れた」という部分に由来していたということになる。その効果に対して、最初は「新茶だから」という説明が共有されていたが、カナの登場によって、その説明は間違っていたということが明らかになっ

たのである。

そう考えると、ここでは、二組のカップ焼きそば現象が重なって生じていたとも言える。第一のカップ焼きそば現象は「お茶」と「新茶」であり、第二のそれは「お茶」と「ハルカの入れたお茶」である。そして、この二つのカップ焼きそば現象同士が、「同じものではないが、異なるものでもない」という「カップ焼きそば現象」を満たす関係を形成している。かなり、頭がごちゃごちゃしてくる状況ではあるが、そこに単に「勘違い」が生じていたということだけであれば、とりたててチアキとトウマが「カップ焼きそば現象」を連呼するほどの重要性はない。そうではなくて、「説明如何に拘わらずそこに明らかな癒やしの効果が生じている」ということが重要なのではないだろうか。つまり、「似たもの」は「区別できない効果」をもたらすのである。

ここで起こっている現象は、実は医療現場などで頻繁に生じている「プラセボ＝偽薬効果」と言われるものに近いと思われる。次節では、「カップ焼きそば現象」に付随して起こるとされる「プラセボ効果」について、考察の対象を広げてみたい。

18. 「カップ焼きそば現象」と「プラセボ効果」

唐突な話題の転換で恐縮だが、読者のみなさんは、オペラ鑑賞に興味をお持ちだろうか。ドニゼッティの『愛の妙薬』という、比較的知られたオペラがある。ドニゼッティは、ロッシーニ、ベルリーニなどと並んで、イタリア・

ベルカント・オペラを代表する作曲家である。この作品は基本的には、オペラ・ブッフア（喜劇）の伝統に属するのだが、魅力的な美しい曲がちりばめられており、その登場人物のキャラクターもストーリーも、単純な喜劇とは言えない、叙情に満ちたロマン主義的な要素をもっている。最近では、一流歌劇場でのライブ上演のDVDが、比較的手頃な価格で手に入るのので、家庭でも手軽に楽しめる。ここで私が紹介したいのは、音楽の話と言うより、ストーリーに関する話なのだが、要するにこのお話は、医療で言うところの「プラセボ（偽薬）」のお話なのである。しばらくおつきあい願いたい。

i) 主観が変わると関係が変わる

『愛の妙薬』の主人公ネモリーノは、純朴な田舎の青年である。彼は、裕福な農場の娘で、奔放で勝気な性格の美人アディーナに一途にほれているのだが、相手にされない。「君のためなら死ぬる」などと、『愛と誠』に登場する石清水（いわしみず）のようなせりふを臆面もなく口にするのだが、アディーナに、「一人の人にしか恋できないなんて病気よ」と、軽く一蹴される。ただし、アディーナは、一途に自分を想ってくれるネモリーノに好意を持っていないわけではない。しかし「いつもグズグズため息ばかりついている」ネモリーノを、うっとおしいと感じており、いつも冷たくあしらっている。

そこへ、博士で医者をも乗るペテン師のドゥルカマーラが登場する。彼い

わく、「私の薬を飲めば、万病全て治り、老人は若返り、不美人は美人になる」。普通であれば「そんな馬鹿な」と思うのだが、村人達は素朴にそれを信じて、我先にと薬を買う。このオペラは200年ほど前の作品だが、この「万病に効く薬」というものは、「健康食品」とか「ミラクルエンザイム」とか「アンチエイジング・サプリメント」とか「ビタミンC大量療法」とかに姿を変えて、全て現代にしっかりと生き残っている。いや現代のほうが、「科学という装い」が強化されているだけ、悪質かもしれない。

正直で純朴で、文字通りに物事を信じる「字義主義者」であるネモリーノは、ペテン師のドゥルカマーラをすっかり信用して、アディーナの愛を勝ち取るために「愛の妙薬」を買うことにする。ここでちょっと面白いのは、「惚れ薬」とは、相手に飲ませて効果を発揮すると考える方が普通だと思うのだが、ここでは、「自分が飲む」ことによって「相手に惚れさせる」効果を発揮するということになっている。ペテン師のドゥルカマーラでさえも「こんなまぬけはみたことがない」とびっくりするほどのネモリーノは、有り金を全部はたいてその「偽薬」を買って、さっそく飲んでしまうのであるが、「その効果が出現するのは、まる一日後」だと言い含められる。しかもその「偽薬」は実は安葡萄酒なので、それを飲んだネモリーノは「うーん確かに効いてきたぞ、身体中に力がみなぎるようだ」と効果を益々信じてしまう（要す

るに酔っぱらったのだが)。この辺りは、現実においてプラセボ（偽薬）効果が発揮されるプロセスを非常にうまく表現している。プラセボとは、「自分（主観）を変容させる薬」なのである。だから、「何かが変わったという感じ」はプラセボ効果を著しく増強させる。それが「何が変わったのか」はとりあえず関係がない。そしてプラセボの効果が発揮されるためには、「文字通りにそれを信じている」ことが必要なのである。

おもしろいことに、一日後にはかならずアディーナの方から自分を愛するようになる、と信じているネモリーノの態度からは、いつものおどおどした自信の無さが消え、アディーナから見ると、今までにはない自信に満ちた落ち着いた態度に映る。これはアディーナを混乱させ、それまでのネモリーノとアディーナとの関係は明らかに変化し始める。

ii) 関係が変わると状況が変わる

「一日後に妙薬の効き目が発現すれば、あこがれのアディーナは、必ず自分に恋をする」という、根拠無き確信を固く抱いたネモリーノは、今までとはうって変わって、落ち着いた冷静な態度でアディーナに接するようになる。すると、これまで、自分に対して一途な関心を抱いていたはずのネモリーノの変わりように、アディーナの方が揺さぶられることになる。両者の「関係」が変化して来たのだ。

余談だが、優秀で能力の高い女性の

中には、「自分に惚れるような男性に惚れることはできない」という心的態度をもっている人がいるように思われる。つまり、相手が自分に好意を示せば自分は醒めてしまい、相手が自分に無関心であればあるほど、自分は相手に関心を持ってしまうのである。当然のことながら、このようなパターンの関係は、ハッピーエンドになることは、理屈上はないはずである。アディーナもおそらくその一人なのだが、そのうまくいくはずのないパターンが、「愛の妙薬」のもたらしたパラドクスによって、変化するのである。

そこで、ネモリーノが自分に関心を示してくれないことに腹をたてたアディーナは、強引で自信家の軍人であるベルコーレのプロポーズを、ネモリーノへのあてつけのために受け入れてしまうという暴挙に出る。結婚式はその日のうちに行われることになり、ここまで泰然自若としていたネモリーノは、大いにあわてることになる。「今日中に結婚されてしまっっては、妙薬の効き目が間に合わない！」

ここから、ストーリーは急速に展開する。絶望したネモリーノは再びペテン師のドゥルカマーラに「なんとかしてください！」と泣きつく。ドゥルカマーラは、抜け目なく「妙薬をもう一本飲めば効き目が早まる」と言う。無一文のネモリーノは、恋敵のベルコーレ軍曹から、軍隊への入隊を条件に契約金を手に入れ、再び「妙薬」を手に入れる。しかし、軍隊の出発は1日後なので、もしアディーナの愛を手に入

れても、1日後には分かれなければならず、兵隊になれば戦死するかもしれない。

ここでネモリーノは、「一日でもアディーナの愛を得ることができるのなら死んでもかまわない」と再び、「石清水的態度」を明瞭にする。このあたりから、この歌劇の「ロマン派」的性格が、明瞭に発揮されるようになる。

iii) 愛の本質の二つの側面

この歌劇は、基本的にはばかげた喜劇的なストーリーなのだが、実は人間の愛の本質に関わる深いテーマに触れる部分がある。ここでは先入観にとらわれず、少し私なりに解釈してみたい。

第一幕の、まだネモリーノが妙薬を手に入れる前の、アディーナとの二重唱「ちょっと、アディーナさん」では、とても深遠な「愛の哲学」が歌われている。

アディーナは歌う。

「一人の人しか恋せないなんて病気よ。私は毎日新しい恋をするの。そうすれば楽しいわ」

ネモリーノが答える。

「毎日違う人に恋するなんて僕にはできない。僕は一人の人を恋する」

アディーナは続ける。

「そよ風に聞いてご覧なさい。『なぜあちらこちらへと吹くのか?』と。そうしたらこう答えるでしょう『それは生まれつきだからよ』と」

常に一つにとどまることなく、変幻自在に変化する妖精、それがアディーナである。しかし、ネモリーノはこ

う切りかえず。

「小川に聞いてご覧なさい。『なぜ自分が生まれた山から流れ出すのか?』と。生まれたところから流れ出せば、必ず海に飲み込まれて消えてしまうというのに」

これはなかなか鋭い返答だ。とてもお馬鹿さんの返答とは思えない。ネモリーノは続ける。

「小川はこう答えるだろう。『見えない力が私を導くのだ』と」

これは、愛のもう一つの本質を的確に言い表している。愛の志向性は、決してあらがえない強制力として人間には感じられる。それに対して、「なぜ?」と問うことは無意味だ。それは見えない力に導かれているのだ。アディーナとネモリーノの愛の哲学は、ここでは交差することはない。それは愛の相容れない二つの側面である。一方は変幻自在でとどまることを知らず、自由奔放。もう一つは盲目的な意志と欲望に支配されており、いささかの自由もない。しかしそこには、避けられない運命を受け入れる崇高さがある。この愛の二つの性質は、相容れないものであるが、この相反するもの同士が、まさに互いに相手を必要としているのである。常に変化し続ける現象と、どうしようもない強制力をもつ「志向性（欲望・関心とも表現される）」は、互いに互いを求め合う。この両者が、同じものではないが、異なるものでもなく、実は一つのものである（不一不異）ということが、おそらくは、愛の原理である。

その相容れないものが、ドラマの第2幕では結ばれるのだ。そのためには、「偽薬＝愛の妙薬」が必要なのだ。愛の妙薬は、エリシール・ダモール、すなわち、愛のエリクサー（魔法の万能薬＝錬金術の賢者の石）なのである。

iv) 偽りの状況は真実を生み出し得るか？

最愛の人アディーナが、恋敵のベルコーレ軍曹と今日中に結婚すると聞かされたネモリーノは、軍隊に入隊契約をしてお金を手に入れ、「愛の妙薬＝実は単なる葡萄酒」を、ペテン師のドゥルカマーラから手に入れる。ところが、事態は、ネモリーノ自身も主要な他の登場人物も知らないところで展開する。少し離れた町に住んでいるネモリーノの伯父が病気で死んで、莫大な遺産をネモリーノに残したという情報が、小間物屋を通じて村娘達に伝わり、彼女らは、今や村の名士となったネモリーノとお金目当てに結婚しようとして、ネモリーノの周りに群がる。

追加の薬を飲んだばかりのネモリーノは、葡萄酒で酔っばらっている上に、周りの村娘達の変わりように啞然とするが、すぐに「これは、愛の妙薬がいよいよ効果を発揮し始めたのだ」と状況を解釈して納得する。そこへ、事情を知らないアディーナとドゥルカマーラがやってきて、村娘達にもてまわっているネモリーノを見て仰天する。

ここで傑作なのは、ペテン師ドゥルカマーラの反応である。彼は、自分の売った薬がインチキ薬であることを誰よ

りもよく知っているのに、ネモリーノに群がる娘達をみて、「これは、オレが売った薬が本当に効いたのに違いない」とあっさり信じ込んでしまうのだ。こういうことは、実は医療でもしばしば起こる（内緒だが）。あまり効くはずがないと思う治療を、患者さんに試してみると劇的に効くときがあり、そうすると医師は、自分の治療が本当は正しかったのだ、と信じ込んでしまうのである。慣れない漢方薬などを初めて使った時などによくこういうことが起こる。

アディーナは、ネモリーノが、自分の愛を得るために、軍隊に入隊して（つまり命を捨てる覚悟で）、愛の妙薬を手に入れたということを知って、それまで馬鹿にしていたネモリーノの崇高な愛情を知り、「自分はなんというひどい仕打ちをしてきたのだろう」と深く反省する。

さてここからが、アディーナの本領発揮である。ネモリーノが、全ての女性に愛される力を薬によって得てしまったと信じ込んだアディーナは、「あなたもこの薬を飲めば、全てが解決する」と売り込もうとするドゥルカマーラに、毅然としてこう答える。

「先生のお薬は本当に効果があるということを私は知っています。でも私にはこの薬は必要ないのです。私は薬よりももっと良く効くものを持っています。それは、私のまなざしであり、私のほほえみであり、私の愛撫であり、私そのものです。私自身こそが『愛の妙薬』なのです。だから私にはこの薬

は必要ありません。ネモリーノは必ず私を愛するでしょう」

これを聞いたドゥルカマーラはアディーナの態度に舌を巻いて、「確かにあなた自身が『愛の妙薬』だ。あなたのほうがワシより一枚上手だわい」と素直に負けを認める。

結局のところ、この後の話はとんとんと進んで、ネモリーノは有名な「人知れぬ涙」のARIAを歌い、その後、「今こそ、『愛の妙薬』は真実のものになるわ。私はあなたを愛しています。私はあなたを幸せにしたいのです」と告白するアディーナを、ひっしと抱きしめて、めでたしめでたしとなるのである。

…このお話は色々な意味でとても良くできていると思う。

最近問題になっている、「病気の押し売り=disease mongering」とか、「医療化=medicalization」とかいう問題と関連付けて考えても、200年も前のこのオペラは多くのことを教えてくれる。「異性にもてない」という問題が薬で治るのならば、「異性にもてない」ということは「病気だ」ということになっ

てしまう。だから、「愛の妙薬」を売り歩くというということは、ある意味では「病気を発明している」ということになる。もちろん、このような「病気の発明」を受け入れる一般市民には、それなりの理由があり、それ自体を非難することはできない。

しかし、愛が得られないことも、愛に苦しむことも、「薬で治すようなものではなく、それは『私』と『あなた』と二人を包む関係性の問題なのだ」ということを見抜いたアディーナの知恵こそが、問題の本質を明瞭に示しているのだ。しかし、同時に彼女には、薬の魔力を無邪気に信ずるネモリーノという相方が必要なのだ。

しかし、めでたしめでたしのネモリーノ君だが、勘違いまくりの結果オーライで、果たしてこのあとどういう運命をたどったのだろうか。ちょっと心配なところではある。

カップ焼きそば現象の考察から、突如としてプラセボ効果の話となり、ある意味では、萌えと恋愛という本題に戻ってきたとも言えるが、果たしてこの序論はいつまで続くのであろうか？ 次回にご期待。